

## 優秀賞

### 母の笑顔がみたい 山形県米沢市立第二中学校 2年 佐藤 未菜

母との楽しいドライブ。母は突然、  
「あの時は、つらかったな。」  
とつぶやいた。そして空が一瞬で暗くなったような表情で私の顔をのぞき込んだ。当時、小学5年生だった私はどきっとして、  
「どうしたの？ なにかしたの？」  
と尋ねた。車は、ある病院の前にさしかかっていた。その病院こそが、母にとって忘れられない場所だったのだ。

「未菜が2歳の時にね、急に脚が痛くなって手術をしたんだよ。ここ、太もものところ。未菜はまだ幼くてお母さんがいなくてつらい思いをするんじゃないかと心配だったなあ……」私は、母の手術を詳しく聞いたことがなかったので、不安ではあったが聞きたいと思った。

車を止めると、母は先ほどとは違う表情で私を見つめて話してくれた。とても真剣な顔、普段見たことのない「母の顔」だった。

「7時間もかかる太ももの骨の手術をしたんだよ。麻酔から目を覚ますと、泣き叫ぶくらい痛かったなあ。」

以前から気になっていた母の太ももの傷が浮かんだ。きっと尋常ではない痛みだったのだろう。母は続けて、

「太ももの病気は難病で、東北地方で手術できる医者がたった一人しかいなかったの。」

私は母の話から、その手術がいかに困難で、痛みを伴うものかがよくわかった。私も小学3年生の時、喉と鼻の手術をしてとても苦しかったが、きっと比較できないほどの痛みだったのだろう。

母は、術後2カ月間ベッドから降りることができず、1年間にも及ぶ過酷なリハビリを始めたという。

「最初は叫ぶほど痛かったんだよ。でもね、お母さんが歩けるように支えてくれた人がいたの。」

「えっ、誰？」

「それはね、理学療法士さん。とっても優しく寄り添ってリハビリを頑張れるように支えてくれたの。感謝しかないんだ。あっ、未菜も優しいから理学療法士を目指してはどう？」

初めて聞く言葉「理学療法士」、その時は何も答えられなかった。しかし、この時「人に感謝される仕事」という言葉が心に響いた。調べてみると、主に病气や事故によって身体に障害や不自由を抱えた人や身体機能が低下した高齢者の方たちに、リハビリを指導して回復のサポートをするのが仕事だった。理学療法士になるには4年かかり、運動療法、物理療法、ADL練習など、かかせない学習内容がたくさんあった。改めて大変な仕事なのだと思うが、母と同じような苦しみを抱える人たちを助けたいという思いが溢れた。

さらに母から衝撃的な言葉を聞いた。

「実はね、お母さんは、もう1回手術をしないといけないの。」

その時、私は頭が真っ白になった。そして次の瞬間には、

「私が理学療法士になって母を助けたい。絶対に理学療法士になる！」

と何度も心の中で繰り返した。

私が理学療法士になれるのは早くても23歳。まだ、10年近くもある。母と二人三脚で、いや、私が母よりも何倍も頑張らなければならないと思っている。

中学2年生の今、私は一生懸命勉強を頑張っている。さらに、もう一つ心掛けていることがある。それは、みんなに優しく接して常に笑顔でいること。私が笑顔でなければ母も笑顔ではいられない。一日一日を明るい気持ちで迎えようと思っている。

理学療法士が支援する患者さんは、肉体的に傷ついているだけでなく、心も大きく傷つき、大きな不安を抱えているはずだ。母も、あまりの苦しさは何度も何度もリハビリを諦めそうになったと語っていた。理学療法士は医学的な専門知識だけではなくて、優しく丁寧に患者さんに寄り添うことが求められるに違いない。

私は、10年後の私に伝えたい。

「もしミスしたら、そこでしっかり学んで成長してね。笑顔を忘れるな。あなたを待っている患者さんたちに優しく寄り添ってあげてね。頑張れ未菜！」と。

私が理学療法士になることを願う母の姿は、何よりも強く私の背中を押してくれる。一生懸命勉強したい。たくさんの人との出会いを通して、もっともっと明るく優しい人になりたい。その先にきっと、大好きな母の満面の笑みが待っていると思う。さらに、母だけではなくたくさんの患者さんたちの支えになって笑顔を届けたい。そして、母を救ってくださった理学療法士の方のように、「ありがとう。」

と心から言われる人になりたい。